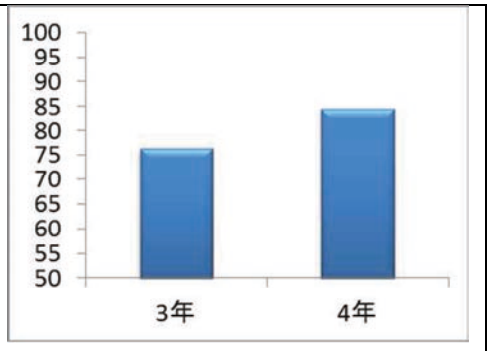
研究代表者	所属学系・職名　外国語・外国文化学系　教授 氏　　名　佐久間　康之
研究課題	小学校外国語活動が児童・生徒の認知的発達に与える影響に関する縦断的研究 A Longitudinal Research on Cognitive Developmental Features of Elementary and Junior High School Students Participating in Elementary School Foreign Language Activities.
成果の概要	**【本研究の目的と成果の概要】** 本研究の目的は小学校外国語活動の効果について縦断的な検証を行うことである。本研究は昨年度の研究の継続であり、引き続き小学生及び中学生を対象とした基礎的データを収集することであった。また、本研究の成果公開とも関連するが、福島県内の英語教育関係者を主な対象とする教育研究フォーラムの開催も本研究の目的の1つであった。今年度も約70名が参加し、福島県を中心とした現職教員と情報共有および意見交換を行うことができた。 **【調査の実施内容】** 小学校外国語活動の現状を把握することを目的として、福島県内A小学校の中学年以上と、福島県内B中学校の全学年を対象とした調査を行った。 まず、昨年度から継続的にデータ収集として、小学校の児童を対象に小学校外国語活動が児童の情意面及び英語リスニング力に与える影響に関わるアンケート調査（5件法）及び英検Jr（BRONZE）を実施した。また、小学校と中学校の接続の観点から、小学校と中学校の児童及び生徒の言語処理の自動化の側面を横断的に調査するべく、日本語と英語の逆ストループテスト及びストループテストをA小学校の児童とB中学校の生徒に対して実施した。また、今年度からのデータ収集として、小学校外国語活動の目的である音声への慣れ親しみを測定する目的で、同小学校の児童を対象にCNRep（Children's test of Nonword Repetition）の聴解版を実施した。A小学校の現状として、半数以上の児童が学校以外で英語を学習している。このことから、英語接触量の顕著な相違に着目し、主に学校のみでの英語学習歴である児童（以下、半年未満の学習者）の小学生と学校以外での2年間以上の英語学習歴を持つ児童（以下、2年以上の学習者）の小学生に分けて比較分析を行うこととした。 **【成果の概要（一部のみ掲載）】** 収集したデータの一部については分析途中である。そこで、本稿では本研究の中で最も基礎的なデータとなる英検Jr（BRONZE）について報告する。なお、中学年についてはデータ収集を実施したのが今年度からであるため、今年度収集したデータの結果のみを報告する。高学年については、昨年度収集したデータと今年度収集したデータの比較を含む。

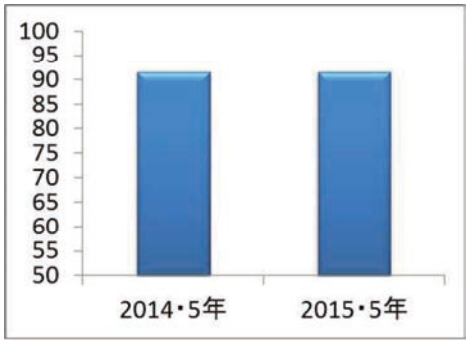
成果の概要

1. 3・4年生のデータ



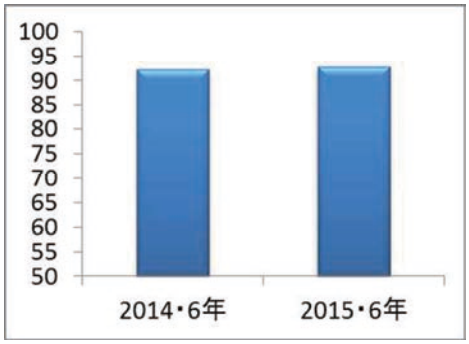
今年度から収集した3・4年生の英検Jrの平均得点率は右図の通りである。3年生は76.28（標準偏差14.11）、4年生は84.58（標準偏差10.34）であった。平均点から判断すると、3年生であっても外国語活動の一定の成果が見られているようにも見える。しかし、協力校における3・4年生に対する外国語活動は年間10時間程度であり、標準偏差が大きいことを考慮すると、学校外での英語学習の影響が強く反映されていると解釈する方が妥当である。今後の分析においても、当初の計画通り、学校外での英語学習の有無によって協力者を分けて分析することが必要になると考えられる。

2. 5年生のデータ



5年生のデータについては2014年度にもデータ収集を行っているため、年度間で比較を行うこととした。平均得点率は右図の通りであり、2014年度5年生は91.45（標準偏差8.30）、2015年度5年生は91.58（標準偏差8.42）であった。従って、平均点や標準偏差に年度間でほとんど違いはなかった。しかし、平均得点率が9割を超えていることから、天井効果を示している。

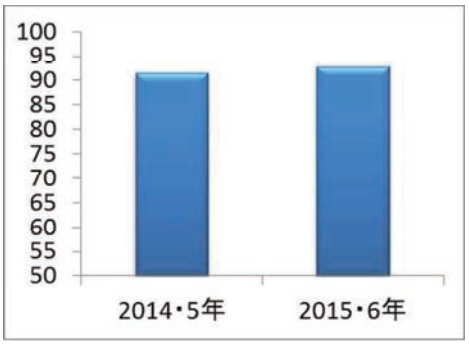
3. 6年生のデータ



6年生のデータについても2014年度にもデータ収集を行っているため、年度間で比較を行うこととした。平均得点率は右図の通りであり、2014年度6年生は92.37（標準偏差6.47）、2015年度6年生は92.80（標準偏差8.05）であった。従って、平均点や標準偏差に年度間でほとんど違いはなかった。しかし、平均得点率が9割を超えていることから、天井効果を示している。

4. 2014年度5年生と2015年度6年生のデータ

2014年度5年生と2015年度6年生を比較することで、同一児童の1年間の児童の変容を検討した。しかし、ほとんど違いは見られなかった。上述のよう

成果の概要	に、5年生の時点で平均得点率が9割を超えていることから、英検Jr（BRONZE）では1年間の変容を捉えられないようである。来年度以降は、英検Jr(SILVER)のデータ収集を模索することが必要かもしれない。  **【今後の課題】** 本研究は外国語活動の効果について長期的な視野で検討を行う点において意義がある。英語教育分野においては横断的な研究が多く、新しい英語教育制度を中長期的に見据えた本研究は当該分野における最先端の研究として学術的な価値も高い。2020年度から小学校英語が大きく改革（小学3，4年生が外国語活動、小学5，6年生が英語科として実施）されることを踏まえ、現在の小学校外国語活動における学習者の現状とその影響（外国語活動経験者の中学生の現状）について多角的なデータを継続的に収集する必要があろう。